

## 要旨

### 【目的】

本研究の目的は、第一に妊娠期乳がんを発症した女性と乳がん既往のある妊産婦の事例について、チャートレビューからその女性の背景、診断時期やステージ、治療方法、妊娠経過から産褥期の経過を記述すること、またその中から特徴的な産婦を2事例抽出し、その産婦に主に関わった助産師へのインタビューを通して助産師のケアの特徴を明らかにすることを目的とする。

### 【方法】

妊娠期乳がんに関するチーム医療を行っている病院1施設において、過去3年間で妊娠期乳がん・既往乳がん妊産婦全事例のチャートレビューを行った。次に、その中から妊娠期乳がん女性1名、既往乳がん妊産婦1名を抽出し、主に関わった助産師3名にインタビュー実施した。チャートレビューによって得られた量的データは、度数、記述統計量を算出し、インタビューによって得られた質的データは、時間軸に沿って[助産師のケア]と[医療チームの連携]を抽出し、カテゴリーを作成した。

### 【結果】

2012年~2014年研究協力施設において、妊娠期乳がん妊産婦は12名(0.35%)、既往乳がん妊産婦8名であった。妊娠期乳がん妊産婦の平均年齢は37歳だった。9割の産婦が乳房のしこりを自覚していたが、「妊娠による乳腺肥大」と自己判断し経過観察していたため、6割の産婦が自覚症状から診断に至るまで1ヶ月以上かかっていた。なんらかの乳がん発症リスク因子を持っていた産婦は91.7%であった。

既往乳がん妊産婦は、平均36歳時に乳がんを発症し、分娩時年齢は平均41歳であった。そのうち62.5%が不妊治療に取り組んでいた。

乳がんを持つ産婦への支援は事例によって様々であったが、授乳支援の場面では「産婦の思いを引き出しできる限りその思いを大切に授乳支援をする」、「授乳できないことで母親としての自信が揺らがないような支援」という共通の特徴が見られた。その支援を通して、産婦は精神的にリラックスすると同時に「母親としての自信」を持つようになっていた。また、医療チームの連携については1カテゴリー[他科と産婦の情報共有を行う]のみ抽出された。

### 【結論】

研究協力施設では、3年間で20名の妊娠期乳がんおよび既往乳がん女性が出産していた。妊娠期乳がん妊産婦は、乳房の妊娠性の変化により発見が遅れる傾向があった。助産師のケアは事例により多様であったが、授乳支援の場面では特徴が見られた。助産師の役割として、妊婦健診における乳がんのリスクアセスメントおよび乳房触診法の実施、Breast Awarenessを基盤とした乳がん啓発活動を行うことが求められている。また、授乳は母子双方にメリットがあることから、産婦の意向を確認しながら支援していくことが必要が示唆された。

(1095文字)